日本の鋸、その歴史と現状

――「中や久作」の検討を中心に

西　和夫

はじめに

日本の大工道具の歴史については、村松貞次郎・中村雄三・土田一郎・平沢一雄・渡辺晶等の諸氏による多くの論考がある。しかし、ここ数年ライデン（オランダ）国立民族学博物館（以下ライデン博と略記する）所蔵になる日本の大工道具の調査を行い[1]、史的検討を加えた結果痛感させられたのは、この大工道具を検討するために必要なこと、知りたいことは、ほとんど何もわかっていないという実情であった。

ライデン博所蔵の大工道具の検討結果は既に述べたので[2]、ここではごく簡単に触れるだけにしよう。すなわち、長崎出島のオランダ商館に勤めたヤン・コック・ブロムホフ、ヨーハン・オーフェルメール・フィッセル、フィリップ・フランツ・シーボルトの三人が一八一七年から二八年までの間に日本で収集した、カンナ（鉋）・ノミ（鑿）・キ

リ（錐）・ノコギリ（鋸）など少なくとも一五七点がライデン博に現存し、長崎の絵師川原慶賀（またはその工房）が描いた道具図も三人のコレクションにそれぞれある。この大工道具の検討は、当時の日蘭交流の様相を明らかにすることに通じるのみならず、当時の日本の大工技術、さらには日本建築の実態を明らかにすることにも役立ち、大きな歴史的価値をもっている。

大工道具は、本来使うものであって鑑賞するものではなく、儀式用のものを除いて後世に残りにくい。日本国内には竹中大工道具館をはじめ大工道具を収集しているところは多いが、年代が明確な大工道具となると意外に少なく、確実に江戸時代のものとなると、さらに少ない。一八一七年から二八年に収集されたことが明確で、多数がまとまって伝えられているライデン博のこの大工道具は、実に貴重な存在である。

ライデン博の大工道具の検討は、種々の知見をもたらした。中でも興味深いのは「中や久作」の刻銘をもつ鋸が三点（コペンハーゲンを含めると四点）見出されたことである（図1）。

当然、「中や久作」とは誰か、いつの人か、どこの人か、これを知ることが必要となる。鋸の作者は名前を襲名することがあるから、何代目なのか、これも問題となる。

もちろん、これ以外にも検討すべき多くの課題がある。しかしここでは、「中や久作」とは誰なのか、そしてなぜオランダ商館の人たちの手にこの鋸が渡ったのか、この点に的を絞って検討することにしよう。

鋸の作者の検討は、今までにも行われている。たとえば村松氏は、「とくに大工道具の産地で知られているのは堺と三木と三条である」と述べ、「堺はその中でも先進地」で、「かなり古くからノコギリの生産が行なわれ、その技術が大阪・伏見・三木などへ伝播したこともかんがえられ」「やがて西の三木、東の三条が大工道具生産の主座を占めるように」なったと指摘している。[3] このように三木（兵庫県）や三条（新潟県）が鋸の産地であることを指摘する論考は多いが、遺憾ながらほとんど根拠が不明である。資料が十分でないため伝聞に頼らざるをえないのはやむをえな

図1　ライデン国立民族学博物館所蔵「中や久作」銘の鋸（長さ75.4cm）
（ブロムホフ・コレクション。左：全景、右：首の部分。ライデン国立民族学博物館の他の2本もほぼ同じ銘）

いが、鋸の作者の研究は十分に行われていないのが現状である。

一　「中や久作」に関する従来の論考

「中や久作」を検討するに当たり、今までどのようなことがわかっているか、「中や久作」だけでなく「中や」全般にひろげて見ておくことにしよう。「中や久作」についての言及で管見の及ぶ範囲で最も早いのは、村松氏の『大工道具の歴史』[4]（一九七三）のようである。江戸の中屋平次郎の油焼入れの技術を天ぷらの匂いをヒントにして取得したのが「古今の名工とよばれた十五代中屋久作だ、という話もある」と紹介された。しかし、「名工談として職人仲間に伝えられた話」だと断っていて、確かな根拠をもつものではない。

村松氏は同書で、会津の中屋重左衛門に学んで天保十三年（一八四二）に二五歳で帰郷開業した中屋庄兵衛が脇野（現在の新潟県三島町、鋸の産地として著名）の鋸の元祖だとされ、『雍州府志』（貞享元年・一六六四、黒川道祐著）に鋸は「伏見中屋の鍛ヘル所ヨシトシ、人コレヲ求ム」とあり、『御大礼記念京都府伏見町誌』（明治四年）には「伏見ノコの起源は四百余前に東中屋某が製作を始め、ついで中屋・谷口の両家も製作着手、中屋は関東地方に、谷口は関西地方に主として販路を有した」とあり、「京都でノコギリの打ち方を習った」と伝える中屋清右衛門が江戸中期に会津で活動し、脇野の中屋庄兵衛はその弟子で、この「庄兵衛の一族・同門が中屋（中谷・仲屋・仲谷）を称するノコギリ鍛冶として」脇野や三条さらに江戸で活動した、とされている。同書にはこれ以外にも中屋につながる人物が紹介されているが、いずれも断片的で、中屋の系譜を村松氏の論考をもとにして整理するのは困難である。

村松氏は、『続・道具曼荼羅』[5]（一九七八）でも「十五代中屋久作」を紹介し、「東京小石川の白山に仕事場を持っていた明治前期の名工」で、「笹葉銘と呼ばれる独特の太い、笹の葉を散らせたような銘で知られている」とし、前

述の天ぷらの匂いをヒントに秘伝を知ったという話と、その人とは知らずに黒田清隆から注文を受けたという話を紹介し、後者は土田一郎氏から聞いたと断っている。

その土田氏は、『日本の伝統工具』[6]（一九八九）で同じふたつの話を紹介し、「十五代、仲谷久作」の銘を刻んだ鋸を写真で紹介している。ただし、写真の刻銘の「仲谷」は、そう言われれば仲谷と読めるが、何も知らなければそうは読めそうにない。村松氏も『続・道具曼荼羅』で「笹葉銘久作」と題して「十五代中屋久作の鍛えた鋸」を写真で紹介しているのだが、紹介されている鋸には「十五代」とは刻まれておらず、土田氏が「仲谷」とするその「谷」に類似した文字が刻まれているものの、「谷」ならともかく、「屋」とはとても読めないし、「作」の文字は読みとれても「久作」と読むのはむずかしい。なぜこれを村松氏が「仲谷」ではなく「十五代」の「中屋」とされたのかは不明だが、「中」と「仲」、「屋」と「谷」は混用するからどちらでもよい、と考えられたのではないだろうか。それにしても、「笹葉」と呼ぶにふさわしい形態が刻まれているだけで、「中屋」あるいは「仲谷」いずれとも読み取るのはむずかしい。おそらく、伝承と総合させて村松氏は「十五代中屋久作」と判断されたものと思われる。

これに先立ち吉川金次氏は、『鋸』[7]（一九七六）で、館山市の中屋久作から一九六五年に直接話を聞いたが、その時、久作は六八歳だったこと、中屋は関東・越後・東北に多いこと、三木市の「黒田家文書」に中屋が出てくるから江戸時代には中屋があったこと、中屋久作は何軒もあり、もっとも有名なのは東京の「中橋の久作」であることを紹介されている。

平沢一郎氏は、『鋸』[8]（一九八〇）で、「中屋久作」の鋸を紹介され、「いわゆる笹葉銘に似た」銘が切られており、銘の「中屋と思われる部分は、それと判読しがたいが、久作は、大きく明瞭」だとし、「銘の右肩のところに『十五代』とある」とされている。年代を「明治時代」とするのだが、根拠は示されていない。また、「当時は、久作を名乗った」のは館山の久作、東京神田の「中橋の久作」などがあるが、平沢氏が紹介されている鋸の作者は「東京小石

川の住人と聞いている」とされている。

このうち村松氏が紹介された『雍州府志』[9]の記事は、

鋸、所々鍛工打レ之其内専造レ之家多號二天王寺屋一、始攝州天王寺門前鍛冶造レ之、倭俗山人木客謂レ杣、杣人自二新秋一至二初冬一入二山林一、伐二取材木一、其所レ用之大鋸伏見中屋之所レ鍛、為レ好人求レ之、

となっていて、実は鋸ではなく大鋸のことである。大鋸は伏見の中屋が作ったと書かれており、鋸は大阪の四天王寺門前の鍛冶が作ったこと、天王寺屋との屋号が多いことを述べているのだが、大鋸も鋸の一種だと考えれば「中屋」に触れた最初の記事となろう。

この他、『大工道具のふるさと古今東西』（竹中大工道具館企画展図録、一九九〇）は、鋸の系譜をわかりやすく整理していて便利だが、中屋久作について説明しているわけではない。竹中大工道具館には胴付き鋸（中屋久作・昭和Ⅰ期）と押え挽鋸（中屋久作・明治時代）の二点が収蔵されていることが『竹中大工道具館収蔵品目録第1号、鋸篇』[10]（一九八九）で知られるが、江戸時代に遡るものはない。

以上のように、中屋久作に関する論述はいくつかあるものの、中屋久作の江戸時代の様相を知るのはまったく困難な現状にある。また、中屋久作の手になる鋸もいくつか紹介はされているが、「十五代中屋久作」を除くと、年代等は明確なものがない。江戸時代に遡るものもない。

つまり、ライデン博の鋸の「中や久作」がどこにいたかなど、まったくわからないのである。

二　江戸時代の「中や久作」

ライデン博の鋸の銘は、三本とも「中や久作」である。「中」であって「仲」ではないことは明確だが、「や」が

「屋」あるいは「谷」、いずれを平仮名にしたものかはわからない。

「中や久作」の銘をもつ鋸はもうひとつ、コペンハーゲン（デンマーク）の国立博物館にもある。一八六六年にブロック氏から寄贈されたものだが、詳しい来歴は不明である。銘をよく見ると、ライデン博の三点とは刻み方が異なり、特に「や」の文字は字体が異なる。また、「作」の字は柄の中にほとんど入り込んでいて全体は見えない。しかし、見えている部分から推して「作」と読んで差し支えないと思われる。

このように、江戸時代、一八二〇年ころの「中や久作」の銘をもつ鋸が合計四点存在する。「久作」がひとりの人物か、居住地はどこか、いずれもわからないのは先に述べた通りである。だが、このままでは、なぜ長崎出島のオランダ商館の人たちがこの鋸を入手したのか、その検討さえできない。もう少し作者に関する手掛りはないものだろうか。

ここで、「久作」に限らず「中屋」に対象を広げて、改めて検討してみることにしよう。

江戸時代の「中や」に関する資料は非常に少ない。先述の通り一六六四年の『雍州府志』に「伏見中屋」とあり、また、三木の大工道具の問屋として名高い黒田家に伝わる『諸鍛冶方連名』[11]（文化十二年・一八一五）の「鋸鍛冶連名」の項に「中屋藤兵衛」の名があるから、江戸時代に活動していたことは確かである。では、それ以外のところではどうだったか。以下、脇野を例にして検討することにしよう。

「脇野町鋸の生みの親」（『三島町史』[12]）と言われるのが中屋庄兵衛である。師匠は「会津鋸中興の祖」中屋重左衛門で、庄兵衛は油焼入れを重左衛門から教えられたことなどが知られているのは既に述べた。しかし、多くは伝聞で、直接それを裏付ける資料に乏しい。しかし庄兵衛については、安政六年（一八五九）の没（四二歳）、法名は釈順説、上岩井の西照寺に墓があることなどを『三島町史』が述べており、実在が裏付けられると判断してよいであろう。また重左衛門も、明治二年（一八六九）三月二十四日の没（五〇歳）で、法名は常誉喜法居士、会津若松大町の融通寺

に葬られていると『三島町史』が述べているのに従えば、これも実在したと判断されよう。

このように、幕末期の三木・脇野・会津で中屋姓の人物が確かに活動している。しかし中屋久作の名はまったく見当たらない。では、明治時代以降はどうであろうか。

明治に入ると、桐生（群馬）の中屋熊五郎の活動が資料で裏付けられる。たとえば、平沢氏が写真版で紹介された第一回全国天王寺鋸伐木品評会の一等賞の『賞状』（明治三十六年十一月二十三日付）に確かに熊五郎の名があり、同じく平沢氏がやはり写真版で紹介された明治三十六年十月二十日付の『江州大鋸鑑定書』には、「衆望鑑定人中屋熊五郎」とともに「介添人」として「中屋久作」の名が見えている。[13] 平沢氏は「久作」についてはまったく触れておられないが、この時点で「久作」がそれなりの存在を認められていたことが確認される。

しかし、ライデン博の鋸の「中や久作」のことは、まだまったくわからない。

三　大正十五年の脇野町の鋸

次に「大正十五年七月廿日印刷、同年五月廿五日発行」の『脇野町市街略図』（三島町郷土資料館所蔵・図2）をもとにして、大正十五年の脇野町の様相を見ることにしよう。この図はほぼ西を上にして描かれている。大正五年（一九一六）開通の長岡鉄道が東端を走り、「脇野町停車場」も見えている。この鉄道は昭和四十七年（一九七二）に廃止され、現存しない。「名所及各営業者案内」と図の副題にある通り、神社や石碑も描き込まれており、「御成婚記念碑」とともに中屋庄兵衛の顕賞碑も見えている。

図の周囲には一六の広告があり、鋸工場四、酒（醸造）四、旅館（うち一軒は料理屋と運送屋を兼ねる）二、銀行一、自転車一、菓子一、仕出し一、材木（旅館と兼ねる）と劇場一、となっている。広告はその土地の有力産業を反

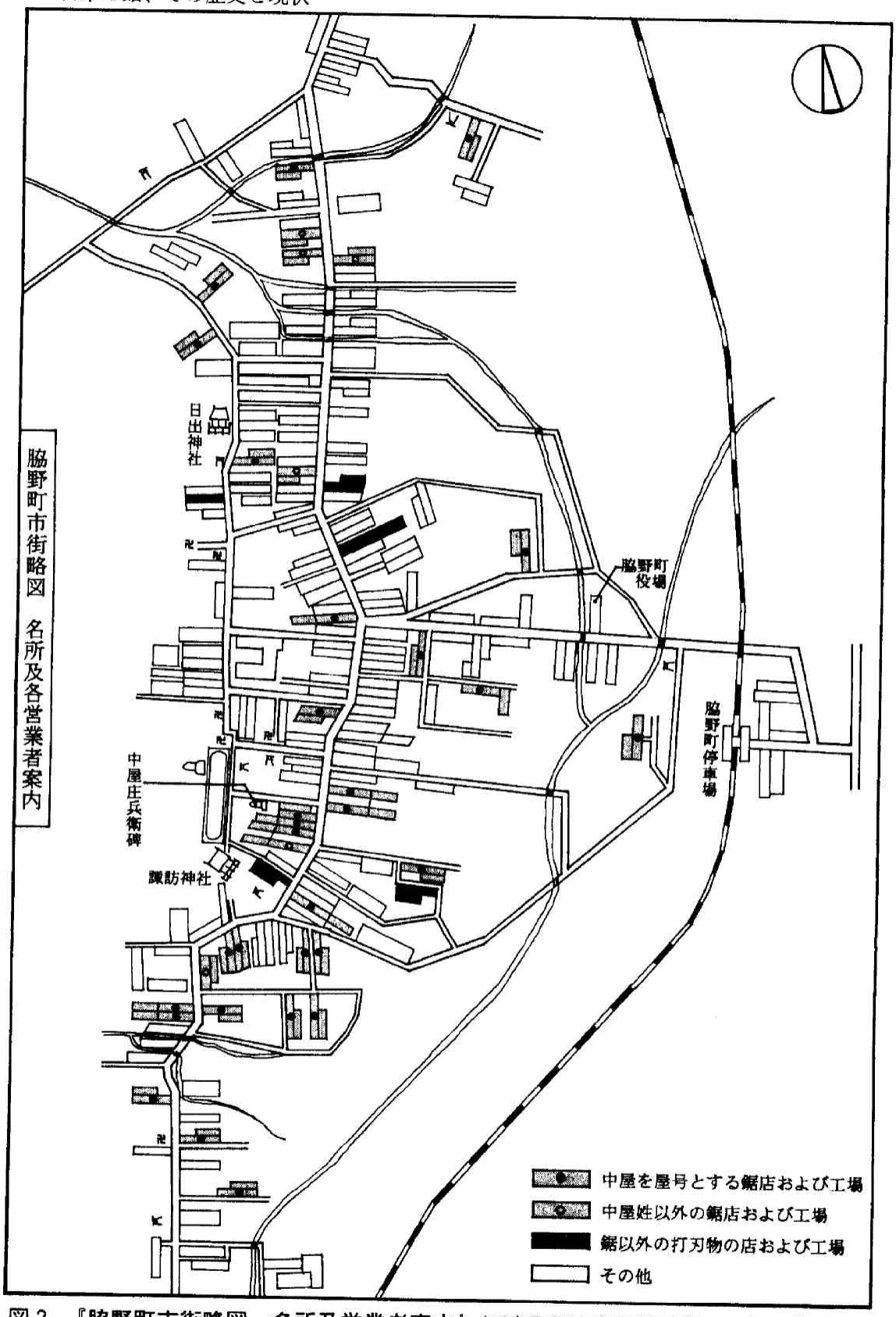

図2　『脇野町市街略図　名所及営業者案内』（三島町郷土資料館所蔵）**による中屋および打刃物店**（図をもとに描き起こした。上が北。各戸の営業者名は省略した）

映するから、酒（醸造）と並んで鋸工場が有力産業だったことを示す。鋸工場は、中屋庄三郎（大工鋸専門）、中屋源二郎（旭正宗印鋸、製造販売、柳貞次）、松葉屋鋸店（玉打松葉屋印、廉価多売主義、優良無比保険附鋸）、中川藤蔵鋸工場（明治四十三年と大正三年に褒賞を受けたと述べている）の四点である。

広告によれば、中屋源二郎の鋸は「旭正宗印」で、本名は柳貞次となっている。屋号と本名は別であることが明確になる。では中屋庄三郎はどうだろうか。「登録商標」が二重丸の中に「東」の文字となっているのを見ると東姓ではないかと推測させるのだが、この点は別な資料で裏付けられるので後で詳しく述べよう。

また地図を見ると、中屋姓の鋸店は三〇軒、他姓の鋸店は六軒、他の道具店（鑿・鉋・手斧・鋏など）は五軒で、大工道具製造者四一軒中八割五分強が鋸製造業、そのうち八割以上が中屋姓を名乗っている。鋸店は隣接して「鋸工場」を必ずもっており、いわゆる家内工業であることを示す。

この三〇軒の中屋に「中や久作」の名は見られない。

ここでひとつ確認しておきたいのは、大正十五年の三〇名の「中屋」は「仲」や「谷」を使わず、すべて「中屋」だという点である。「仲谷・中谷・仲屋」は見られない。

四　昭和三年の全国金物名鑑に見る全国の中屋

脇野町のその後を知るには、昭和三年（一九二八）の『全国金物名鑑』[14]が参考になる。その名の通り全国の金物関係業者の名簿を県別、業種別に示したものである。

このうち新潟県について見ると、鉄鋼地金・銅真鍮地金・万銅鉄金物・銅鉄錫器物・諸機械工具及附属品・打刃物砥石・古銅鉄機械・鉄工機械・鑢・鋳物・度量衡器・土工具・農蠶具・喞筒・鋳造・鍛冶・鍼力銅細工・製鑵・船

長岡市長町二ノ一六三九　日本機械製作所合資會社
同　四新町七四一　北越機械工業株式會社
新潟市港町二ノ町　本田商店　時機械製作
長岡市喜町三ノ四三〇　鷺張邦平
新潟市古町通四番町五八〇　吉田德右衛門
同　沼垂町四橋町八五八　よしや　田邊作平
同　入舟町三ノ九　竹前機械電氣工業所
同　沼垂町七ノ六三一　津野長三郎
長岡市長町二ノ一六四三　難波又三郎
新潟市本町通七番町一一五二　山九　山岸牛三郎
長岡市觀光院町　谷内田茂　醸造用具
同　城内町一ノ七八五　丸羽商會長岡出張所
同　千手町三ノ七〇六　馬屋　小林商會
新潟市秋川岸通二丁目　小島榮七　金物電動機
同　蛸木町川岸二三九二　遠藤作治　銅鐵工具金物
同　東入船町三七〇九　島本鐵工部
長岡市長町二ノ一六四五　白井機械店　白井寅次　火消壺安全
高田市下紺屋町七九　柴山大三郎

打刃物砥石　大工道具

三島郡與板町　石黒甚作　鉋
同　同　岩本健次郎　同
同　同　池浦清一　同
同　同　岩本太三郎　同
同　同　池田佐武郎　同
同　同　石橋貞次　同
同　同　今村藤吉　同
同　同　五十嵐久次　同
三島郡與板町　石櫛留次郎　鑿
同　同　今村佐平次　鋸
同　同　伊藤清定　下駄道具
新潟市東堀前通四番町　石丸熊吉　鉄
同　沼垂町字蒲原　清定　岩橋兼光　鉋
同　東堀通十二番町　兼光　石塚龍平　天王寺鋸
南蒲原郡三條町一ノ木戸　重衛門　五十嵐產次郎　各種鋸ヤスリ
同　同　中屋　石田鐵平　銅鐵打刃物
同　同　五十嵐萬吉　鋸
三島郡與板町　原久松　マサカリ
同　同　原田藤平　鋸
同　同　長谷川長五郎　ナイフ
同　同　濱田六三郎　鉋及鉄
同　同　原榮八　鋸
同　同　長谷川留吉　農具
同　同　早川司馬吉　鋏
同　脇野町村　原賢之　鋸
同　同　松葉や賢次郎　原七太郎　同
同　同　中屋庄吉　原芳丸　同
新潟市上大川前通十二番町　清廣　中屋芳之助　長谷川清廣　下駄道具
同　熊谷小路　清正　長谷川清正　鉋
三島郡與板町　西山所八　鑿
同　同　韮澤惣吉　鉋
南蒲原郡三條町由利　西庄吉　同
三島郡與板町　本間藏　新剪定鋏
西蒲原郡地藏堂町　本間啓太郎　鋏
三島郡與板町　鳥山寅治　鉋
同　同　遠山寅治　同
同　同　遠山安次郎　鑿

図3　『全国金物名鑑』（昭和3年）の新潟県「打刃物砥石」の項（部分）

	都道府県	住所	商號	営業氏名	営業細目	項目
1	東京	神田区和泉町1-11		中屋仁三郎	大工道具	打刃物砥石
2	東京	京橋区本八丁堀1-15	中屋商店	清水喜太郎	諸各種	打刃物砥石
3	東京	小石川区氷川町		中屋丞	鋸	打刃物砥石
4	東京	小石川区西原町2-29		中屋鍛作	鋸	打刃物砥石
5	東京	小石川区伯ケ谷町35		中屋久作	鋸	打刃物砥石
6	東京	本郷区駒込林町228		中屋米次郎	鋸	打刃物砥石
7	東京	北豊島郡西巣鴨町池袋508		中屋東吉	鋸	打刃物砥石
8	神奈川	足柄下郡小田原町寺町28		中屋長次郎	鋸大工道具	打刃物砥石
9	兵庫	美嚢郡三木町駅前	中屋常五郎	村上常三吉	鋸	打刃物砥石
10	新潟	岩船郡村上町庄内町		中屋源十郎		高調鋼金物
11	新潟	岩船郡村上町庄内町		中屋重太郎		高調鋼金物
12	新潟	南蒲原郡三條町一ノ木戸	中屋	五十嵐萬吉	鋸	打刃物砥石
13	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄吉	原七太郎	鋸	打刃物砥石
14	新潟	三島郡脇野町村	中屋芳之助	原芳丸	鋸	打刃物砥石
15	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄五郎	尾竹友策	鋸	打刃物砥石
16	新潟	三島郡脇野町村	中屋藤次郎	小熊藤蔵	鋸	打刃物砥石
17	新潟	三島郡脇野町村	中屋清左衛門	小川清次郎	鋸	打刃物砥石
18	新潟	三島郡脇野町村	中屋平三郎	小熊徳次	鋸	打刃物砥石
19	新潟	三島郡脇野町村	中屋竹次郎	柳澤竹次郎	鋸製造	打刃物砥石
20	新潟	三島郡脇野町村	中屋虎次郎	柳澤太四郎	鋸製造	打刃物砥石
21	新潟	三島郡脇野町村	中屋平司	片桐平司	鋸製造	打刃物砥石
22	新潟	三島郡脇野町村	中屋六三郎	田中六太郎	鋸製造	打刃物砥石
23	新潟	三島郡脇野町村	中屋興作	鵜波興蔵	鋸	打刃物砥石
24	新潟	三島郡脇野町村	中屋藤蔵	中川藤蔵	鋸	打刃物砥石
25	新潟	三島郡脇野町村	中屋新一郎	中川新一郎	鋸	打刃物砥石
26	新潟	三島郡脇野町村	中屋興五郎	中川村吉	鋸	打刃物砥石
27	新潟	三島郡脇野町村	中屋象五郎	中村象五郎	鋸	打刃物砥石
28	新潟	南蒲原郡三條町		中屋徳治	鋸	打刃物砥石
29	新潟	南蒲原郡三條町一ノ木戸		中屋伊三郎	鋸	打刃物砥石
30	新潟	三島郡脇野町村	中屋源二郎	柳貞次	鋸	打刃物砥石
31	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄作	柳常太	鋸	打刃物砥石
32	新潟	三島郡脇野町村	中屋久助	柳栄吉	鋸	打刃物砥石
33	新潟	三島郡脇野町村	中屋左之介	松村力次	鋸	打刃物砥石
34	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄右門	松村鶴蔵	鋸	打刃物砥石
35	新潟	南蒲原郡三條町大字島田	中屋	深澤伊之助		打刃物砥石
36	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄五郎	古見陽蔵	鋸	打刃物砥石
37	新潟	三島郡脇野町村	中屋伊二郎	古見熊三郎	鋸	打刃物砥石
38	新潟	三島郡脇野町村	中屋伊太郎	小林久作	鋸	打刃物砥石
39	新潟	三島郡脇野町村	中屋亨一郎	小林亨一郎	鋸	打刃物砥石
40	新潟	三島郡脇野町村	中屋伊吉	小林吉四郎	鋸	打刃物砥石
41	新潟	三島郡脇野町村	中屋新二郎	小林高次	鋸	打刃物砥石
42	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄三郎	東庄三郎	鋸	打刃物砥石
43	新潟	三島郡脇野町村	中屋庄太郎	東末蔵	鋸	打刃物砥石
44	新潟	三島郡脇野町村	中屋吉三郎	東吉三郎	鋸	打刃物砥石
45	新潟	西蒲原郡黒崎		中屋金三郎	金三郎印鋸鉋	雑
46	埼玉	熊谷町星江町3091	中屋	松本豊吉		鋸機械工具及附属品
47	埼玉	川越市		中屋清次郎正義	鋸製造	打刃物砥石
48	群馬	桐生市本町3丁目		中屋熊五郎	鋸ヤスリ専門	打刃物砥石
49	栃木	那須郡烏山町鍛冶町309	中屋	益子嘉吉		高調鋼金物
50	栃木	上都賀郡今市町相生町		中屋音次郎		打刃物砥石
51	三重	宇治山田市宮川町	中屋	山川清次郎	各種鋸	打刃物砥石
52	長野	諏訪郡下諏訪町春社大門	中屋	有賀倉蔵	鋸業	打刃物砥石
53	福島	若松市博労町46	中屋	井上重兵衛	各種鋸	打刃物砥石
54	福島	若松市中六日町102		中屋幸右衛門	各種鋸	打刃物砥石
55	福島	若松市博労町		中屋忠兵衛	鋸	打刃物砥石
56	福島	若松市博労町33	中屋	小島忠左衛門	各種鋸	打刃物砥石
57	福島	若松市材木町307	中屋	佐藤善兵衛	各種鋸	打刃物砥石
58	福島	若松市材木町377	中屋助左衛門	塩野吉蔵	各種鋸	打刃物砥石
59	岩手	下閉伊郡宮古港新町		中屋徳三		打刃物砥石
60	山形	山形市鍛冶町	中屋	井上善治	鋸製造	打刃物砥石
61	山形	東村山郡天童町23	中屋	伊藤九兵衛	鋸専門製作	打刃物砥石
62	山形	山形市伊賀町		中屋庄三郎	鋸製造	打刃物砥石
63	山形	山形市鍋屋寺町		中屋正光	鋸製造	打刃物砥石
64	山形	米沢市鍛冶町	中屋	永井太兵衛	鋸製造	打刃物砥石
65	山形	米沢市北堀端町		中屋助右衛門	鋸製造	打刃物砥石
66	山形	山形市鍛冶町		中屋源四郎	山形鋸製造	打刃物砥石
67	山形	東村山郡天童町		中屋乙松	鋸製造	打刃物砥石
68	山形	北村山郡高崎村大字鶴山		中屋清作	鋸製造	打刃物砥石
69	山形	山形市鍛冶町		中屋重三郎	鋸製造	打刃物砥石
70	山形	山形市小姓町		中屋新太郎	鋸製造	打刃物砥石
71	山形	山形市 鍛冶町109		中屋時治	鋸製造	打刃物砥石
72	山形	西置賜郡荒砥町		中屋彦三郎	鋸製造	打刃物砥石
73	山形	最上川鮭川	中屋鋸	山科金作	山形鋸特産各種鋸	打刃物砥石
74	山形	山形市鍛冶町37		中屋光三郎	山形鋸製造	打刃物砥石
75	北海道	旭川市二條通16丁目		中屋金物店		高調鋼金物
76	北海道	天塩国留萌郡留萌市街南山手通	中屋	横江要次郎		打刃物砥石
77	北海道	胆振国有珠郡壮瞥村		中屋善太郎	大工鋸下駄鋸天王寺鋸製造	打刃物砥石
78	樺太	豊原郡豊原町西一條南7		中屋忠吉	鋸、打刃物	打刃物砥石

表１『全国金物名鑑』による「中屋」総覧（順番は掲載頁による）

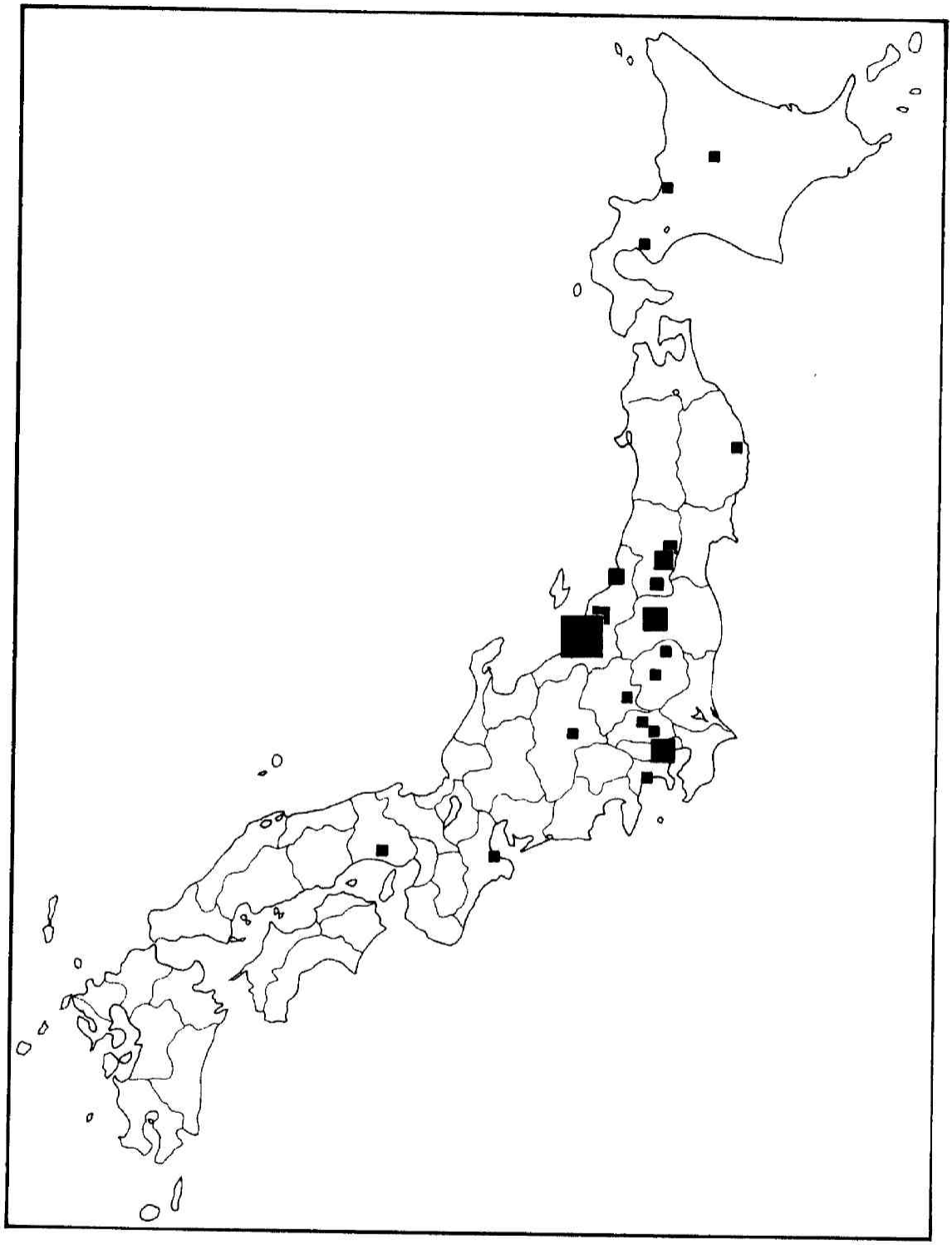

図4　『全国金物名鑑』にみる中屋姓の全国分布
(最多は脇野、その右上は三条。この他、東京・会津・山形が多い)

具・鍍金・瓦斯電気器具及機械・板硝子・金銀細工及地金・煙管・各種類（建築金物・金網・金庫・ゴム・塗料・食器具・鉄筋・手鍵）、以上二五業種に分け、地域別に名簿が作られている。打刃物砥石の項には、与板・三条・新潟市内等、一八一名の名が挙げられている（図3）。そのうち与板が一〇〇名（五五パーセント）、脇野が三八名（二一パーセント）、三条が一三名（七パーセント）、この三者で八三パーセントを占める。工具の種類でみると、鉋が最多で六一名（三三パーセント）。以下鋸の四一名（二八パーセント）、鑿一七名（九パーセント）と続く。

中屋を名乗るのは、三条一名、脇野二九名ですべて鋸である。脇野の鋸で中屋以外は七名だから、脇野の鋸三六名中八〇パーセントが中屋となる。三条の一名を除くと、中屋は脇野に限られる。ちなみに、与板の鋸は二名しかおらず、与板は圧倒的に鉋である。

この名鑑は、全国の様相を知ることができる点で貴重である。今、試みに全国の中屋姓（本名あるいは商号）を抜き出すと、表1のように、全部で七八名が掲載されている。昭和三年時点でのいわば全国中屋総覧で、中屋が新潟・山形・会津・東京に多いこと、西日本には三木の一人以外には見られないこと、中国・四国・九州には見られないこと、すべて「中屋」で「仲」や「谷」の字は使われていないこと、などを知ることができる。図4はそれを地図上に表示したものである。

以上のように、現在入手した資料で見る限り、「中屋」については「仲」あるいは「谷」の字は用いられていないことが判明した。では、ライデン博等の四本の鋸の銘が「屋」ではなく「や」となっているのはなぜか、その検討をここでしておくことにしよう。

結論を先にいえば、「や」になっているのは、この銘が切銘すなわちタガネで切って刻み付ける銘であるからだと思われる。タガネで刻み付ける場合、「屋」の字は線が込み入っていて刻むのがむずかしい。だから平仮名の「や」を使ったのではないだろうか。平仮名の場合、曲線が多いから刻むのがむずかしそうにも思われるが、すでに漢字の

場合も「作」の字など曲線を多用しており、さほどむずかしくはなかったのではないだろうか。

さて、すでに触れたように、脇野で見る限り、大正十五年と昭和三年の人数はともに三〇人で、以上の全国的な分布は明治期の状況につながるものと推測される。そしてまた、人数は同じではないとしても、鋸職の系譜としては、幕末期にまでつながるのではないだろうか。なお、この他に東京府北豊島郡尾久町の「中信　神田信夫　鋸」の「中信」は「中屋」と「信夫」からの命名、福島県岩瀬郡須賀川町の「中多鋸店　土沢多一郎　各種鋸」の「中多」は「中屋」と「多一郎」からの命名ではないかと思われるのだが、断言できないのでこの表からは省いている。

五　東京の中屋久作

ここで注目すべきは、東京の三人の中屋である。その中に「中屋久作」が確かにいる。

小石川区	氷川町	中屋丞	鋸
同	西原町二―二九	中屋鉄作	鋸
同	指ヶ谷町三五	中屋久作	同

三人の住所は、明治四十年（一九〇七）の『東京市小石川区全図』[15]によってその位置を地図上に確認することができる。さらに、その位置を現在の地図に当てはめて検討すると、文京区白山に含まれることがわかる。土田氏によると「十五代仲谷久作の仕事場」は「神田今川橋から移り、小石川・白山」にあったという。[16] 村松氏も先に見たように「小石川区白山に仕事場を持っていた」とされた。また平沢氏は、「東京小石川の住人」としての中屋久作を紹介された。もうひとり神田の「中橋の久作」も紹介されているが、これについては現在のところ不明なのでしばらく擱くとして、中屋久作が今川橋から移ってきた、その移転先が白山であることはまず間違いないといえるだろう。明治四十

年当時、「帝国大学植物園」（現、小石川植物園）のあたり（指ヶ谷町のすぐ西北に当たる）が白山御殿町となっていて、現在よりずっと狭い範囲を指しているが、指ヶ谷町を「小石川の白山」と呼んだ可能性は十分にある。

中屋久作の住所「指ヶ谷三五」は、時代を二〇年遡った明治二十年の『東京五千分壹実測図』[17]（内務省地理局）によると、蓮華寺のすぐ東にその敷地位置を確認できるものの、地番「三五」の記入がなく、地図の表示は畑で、宅地にはなっていない。すなわち、「指ヶ谷三五」は明治二十年以降同四十年までの間に宅地として使えるようになった可能性が高く、「中や久作」がどこか他のところから明治二十年から四十年の間にここに移ってきたと考えるのがよさそうである。とすれば、伝承に言う「神田今川橋」から移ってきたというのを認めてよいのではないか。神田今川橋は、現在のＪＲ神田駅の東のあたりにあった。旧日本橋区と京橋区の境に位置し、現在の室町四丁目と本町四丁目のすぐ北になる。昭和二十年の地図ではまだ川があり、「今川橋」が架かっているが、昭和三十三年の地図では川も橋も姿を消している。

オランダ商館長が江戸参府の際に宿泊した長崎屋は本石町三丁目にあったとされている。現在の本町四丁目あたりである。ここから今川橋までは実に近いことを確認して先に進もう。

六　長崎屋との関係

昭和三年当時、鋸製作者としての中屋の居住地は脇野町、山形、会津、東京が多く、中屋は商号で本名は別であることを述べた。また脇野町の項で、中屋庄三郎の商号から判断して本名は東姓ではないかと指摘した。昭和五十一年の『脇野町鋸師弟系譜』[18]の「組合員名簿」には、組合員五九名、うち中屋姓四八名が示されており、先に示した大正十五年、昭和三年の資料と合わせて整理すると表2の通りとなる。[19]これで中屋庄三郎は東姓であることが明らかとな

中屋庄兵衛 (天保13年創業) [会津若松、 中屋重左エ門に師事] 文政元年生 ～安政6年殁	東吉之助 (万延元年・1860) 文政11年生～ 明治14年殁	東長吉	柳常太(明32)	中屋庄作	●柳　常次＊	中屋庄作							
			東庄三郎	中屋庄三郎	元井藤作(昭8)	中屋仁一郎	小熊仁吉(昭28)		小熊　仁	中屋仁之助			
					●東　庄司	中屋庄三郎	浅野吉之助(昭26)	中屋吉之助					
					浦藤正二(昭10)	中屋庄二郎							
			東信蔵(明35)		田中六太郎	中屋六三郎							
					中村条五郎	中屋条五郎							
					丸山由之助(昭6)	中屋芳太郎							
					●東馨		●東　正昭	中屋庄太郎					
			東末蔵(大14)	中屋庄太郎									
			東吉三郎(大7)	中屋吉三郎									
			小川喜三郎(大8)	越後喜三郎	●小川正次	中屋喜三郎							
			東長次(昭5)		●東　長一＊	中屋長二郎	柳　松雄＊	中屋門次郎					
		丸山庄蔵	古見村吉(明14)		●古見隆蔵	中屋庄五郎	松村力次(大8)	中屋左之助	柳　常次＊	中屋庄作			
									●松村清吉	中屋庄之介	小林弘司(昭42)	中屋弘之助	
							原貴之(大8)	松葉や賢次郎	丸山美佐五郎(昭5)	中屋美佐五郎			
									柳　鉄雄＊	中屋鉄之助			
									●原　武嗣	松葉屋			
							尾竹友策(大15)	中屋庄五郎	●尾竹金司	尾竹庄市真			
							●古見哲二	中屋庄五郎					
							小川司郎(昭31)		小川　仞	中屋庄兵衛			
			中川清吉(明14)		①中川藤蔵(明24)	中屋鼎蔵	●②中川藤蔵		片桐平司(大12)	中屋平司	片桐平一＊	嶋印	
									●中川幸次郎	中屋鼎蔵			
							木戸与三郎(大10)		元井武夫(昭7)	中屋武五郎	元井愿一(昭36)	中屋亀左エ門	
									小熊　勝＊	中屋平三郎			
					柳源次郎(明18)		●柳謙一		●柳　鉄雄＊	中屋鉄之助			
							柳条吉	中屋久助	●柳　久七(大12)	中屋久助	穂沢仁作(昭18)		近藤常作(昭36)　中屋秀俊
					加藤平三郎[出雲崎]		小熊重次(大8)	中屋平三郎	●小熊　勝＊	中屋平三郎			
					藤波真蔵(明35)	中屋與作	小熊藤蔵(大13)	中屋鶴次郎	●小熊　博	中屋鶴五郎			
									平原昭次(昭31)	中屋昭次			
							原芳丸(大10)	中屋芳之助					
							中川新一郎(大12)	中屋新一郎					
							原　要吉(昭22)	中屋要吉					
			古見条次郎(明23)		小林吉四郎(明32)	中屋伊吉							
					小林与七(明39)		片桐嘉次(大10)		中村勉一(昭6)	中屋猪右エ門			
									中村辰雄(昭18)	中屋辰之助			
									片桐新吾(昭24)	中屋新五郎	片桐堅吾(昭25)	三島東賢	
									古見正七(昭24)	中屋鶴次郎			
									●片桐勝雄	片桐直志郎	小林正男＊	小林伝次郎	
											東　正昭	中屋庄太郎	
					小林久作(明44)	中屋伊太郎	小林伝一郎(昭7)		●小林正男＊	小林伝次郎			
							小林義友(昭8)		大滝豊作(昭35)	中屋豊作			
							片沼政一(昭9)	中屋政太郎					
					原七太郎	中屋庄吉							
					古見条三郎	中屋伊二郎	小林真次(大12)	中屋新二郎	山村清作(昭11)		●山村　攻	中屋清之助	
									●小林哲男＊	中屋新太郎			
							柳門次郎(大12)		東　長一＊	中屋長二郎	●東　貴一郎	中屋長二郎	
									●柳　松雄＊	中屋門次郎	梶沢篤一(昭42)		
							片桐伸次(昭11)	中屋信二郎					
							山田高巻(昭９)	中屋幸二郎					
							片桐虎資敏(昭21)	中屋虎三郎					
							安立作一(昭21)	中屋虎五郎					
							古見哲雄	旭伊三郎	片桐富一(昭33)	中屋富一			
									小林哲男＊	中屋新太郎			
					柳真次(大7)	中屋源二郎	●柳　正男	中屋源二郎					
					松村鉄蔵(大10)	中屋庄右門	原山竹次(昭16)	中屋武市郎					
							●松村健一	松村健一					
	庄左衛門 (本名　大谷佐助 嘉永3年創業 文政12年生～明治13年殁)	①大矢惣吉 [柏崎]	②大矢惣吉		相沢権吉(柏崎)		長谷川新司(昭23)	中屋真次郎	片桐平一＊	嶋印			
							中川一男(昭22)	中屋仁左エ門					
							河内伴次(昭25)	中屋伴造正直					
					小川清次郎(大13)	中屋清左衛門							
	庄之助[長岡]	①前田力蔵 [小千谷]	②前田力蔵		梶沢太一＊	中屋竹二郎	小林哲男＊	中屋新太郎					
中川仁作[上州召田]			中川村吉(大10)	中屋與五郎	渡辺庄五郎(昭11)	中屋五助	岡本誠一(昭48)	中屋誠一郎					
③深沢伊之助[三条]		①深沢定次[三条]	●②深沢定次		●③深沢定次		中川幸次郎	中屋鶴蔵					
		深沢源治 [三条]	樺沢竹次郎(大8)	中屋竹次郎	梶沢幸四郎(昭8)		●梶沢幸雄	中屋幸四郎					
					西原米作(昭4)	中屋米三久							
					中川雄七(昭9)	○市							
					梶沢太一＊	中屋竹二郎							

括弧は『脇野町鍛師弟系譜』による創業年。＊は師が複数存在する人、①は初代、②は２代目、③は３代目を表す。●は師弟が親子関係であることを示す。

表２　脇野　鍛冶系図

る。また、商号あるいは本名に「久」や「作」の字を含む者はいるが、中屋久作はいないことも確認される。全国一の鋸産地脇野には中屋久作はいなかった。表1や表2で明らかなように、三木には中屋は一名しか見られず、中屋久作はいない。また三条や与板、あるいは山形や会津にもいない。東京にしかその存在を確認できない。

一八二〇年ころもそうなのか、裏付ける資料を欠くが、すでに見たように、大正十五年と昭和三年の様相から見て、商号は継承されることが多いから、江戸時代の中屋久作もやはり江戸にいた可能性が高いと言ってよかろう。そして、その居住地は、現在入手した資料で見る限りでは神田の今川橋であった可能性が高い。

すでに指摘したが、今川橋は長崎屋のあった本石町三丁目に極めて近い。オランダ商館員三人が長崎屋で「中や久作」銘の鋸を入手し、「中や久作」は近くに住んでいて、その製作物が長崎屋に持ち込まれた、という可能性を考える必要がある。

フィッセルは日記の一八二二年三月二十七日条にこう書いている。[20]

此處にても商人又は行商人来りて、我等に美しき物品を勧めしが、通常長崎にて求むるよりも余程安価にて、且つ品質も遙に優良なりき。

「此處」とは長崎屋である。商人が品物を売り込みに来ており、長崎より良い品を安く入手できるという。大工道具がその中に入っていたかどうかは不明だが、「中や久作」銘の鋸を、三人の商館員がいつどこで、どのような理由で入手したか、蓋然性のある説明が全く見当たらない今、長崎屋の近くに中屋久作が住んでいた可能性があることを看過するわけにはいくまい。

おわりに

ライデン博に所蔵される「中や久作」銘の鋸が長崎屋で入手され、それは「中や久作」が近くの今川橋近辺に住んでいたからではないかとの見解を以上に示した。裏付ける確実な資料を欠くものの、昭和三年における中屋の全国的分布や脇野町を例にした鋸製作者の商号と本名の関係、師弟の系譜などをもとに、その蓋然性が高いのではないかと指摘した。

ところで、現在、脇野町の鋸製作の実情はどうなっているか。

一九九九年八月の東賢一郎氏の教示によると、三島町の鋸製造者はなんとわずか二軒、中屋長二郎（実名東長一、息子賢一郎）と中屋仁左衛門、これだけである。なぜこのように急激に減少したのだろうか。

伝統的な鋸は、切れなくなると目立てをする。目立てには鋸一本につきヤスリ二本を使う。ヤスリ一本は六〇〇円で、手間賃を入れると鋸一本の目立て代は少なくとも一五〇〇円になる。ところが現在、使い捨ての鋸、つまり切れなくなっても目立てをせずに捨てて新しいものを使う、そのような鋸が一本三〇〇円で手に入る。ニクロム線を熱して瞬時に焼入れする「衝撃焼入れ」鋸が普及し、使い捨ての鋸が多く流通するようになった。三本八〇〇円というような売り方までしている。これでは目立てを必要とする鋸を買う者はいなくなる。伝統的鋸は、かくして急速に消えつつあるのだと言う。

確かに、鋸に限らず、使い捨ての考え方が増えている。文化全般が使い捨てになりつつある今、鋸も例外ではいられない。鋸は、その作り方も、使い方も、そして鋸を使って生み出される建築も、すべて時代と文化の所産なのだが、それが今消えつつある。

伝統的鋸が消えつつあるのを止めるにはどうしたらよいか、今すぐに名案はない。しかし、このような時節だからこそ、鋸の歴史を検討する意味はいよいよ大きい、と言えるのではないだろうか。

註

(1) 西和夫の他、マティ・フォラー（ライデン国立民族学博物館）、フォラー・くに子（ハーグ市、王立図書館）、波多野純（日本工業大学）、田中厚子（アクセス住環境研究所）、小沢朝江（湘北短期大学）、山田由香里（神奈川大学大学院）の七名の共同研究である。

(2) 西和夫「海を渡った大工道具――長崎出島からライデンへ」『民具マンスリー』第三二巻五号、神奈川大学日本常民文化研究所、一九九九年八月。西和夫・波多野純・田中厚子・小沢朝江・山田由香里「ブロムホフ、フィッセル、シーボルト収集になる日本の大工道具とその収集経緯」、波多野純他「絵画史料等によるライデン国立民族学博物館所蔵大工道具の検討」『日本建築学会大会学術講演梗概集』一九九九年九月。

(3) 村松貞次郎『大工道具の歴史』岩波新書、一九七三年。

(4) 註(3)に同じ。

(5) 毎日新聞社、昭和五十三年。

(6) 土田一郎『日本の伝統工具』SD選書、鹿島出版会、一九八九年。

(7) 吉川金次『ものと人間の文化史、鋸』法政大学出版局、一九七六年。

(8) 平沢一郎『産業文化史、鋸』クオリ、一九八〇年。

(9) 『新修　京都叢書　第三巻』光彩社、昭和四十三年。

(10) 竹中大工道具館、一九八九年。

(11) 『三木金物問屋史料』永島福太郎編著、思文閣出版、昭和五十三年。

(12) 上巻、三島町史編集委員会、昭和五十九年。
(13) 註(8)に同じ。
(14) 和田仁義編集、東京金物新報社、昭和三年。
(15) 『東京郵便局　明治四十年　東京市十五区番地介入地圖』人文社、昭和六十一年。
(16) 註(6)に同じ。
(17) 大日本測量㈱資料調査部複製。
(18) 脇野町鋸工業協同組合・三島町商工会、昭和五十一年。
(19) 山田由香里「脇野鋸鍛冶の銘について」(第2回大工道具研究会、一九九九年八月)による。なお、この研究会では、波多野純「板厚からみた大鋸の導入時期と地域展開」、田中厚子「エルミタージュ美術館の川原慶賀の論文紹介」、小沢朝江「コペンハーゲン国立博物館所蔵大工道具について」などの報告があった。
(20) 異国叢書『ズーフ日本回想録・フィッセル参府紀行』雄松堂、昭和二年初版、昭和四十一年復刻。

(にし・かずお　日本建築史)